小學脩身課書

南摩綱紀編

四

K110.1
112
4

K110.1

188b

南摩綱紀編

小學脩身課書

明治十五年四月
廿五日版權免許

中外堂藏版

東京帝國大學圖書之印

小學脩身課書卷四　初等三年前期

南摩綱紀編

○孝を以て君に事ふれば則ち忠。弟を以て長に事ふれば則ち順。忠順失はざる。以てその上に事ふ。孝經

○天の道を用ひ。地の利に因り。身を謹み。用を節し。以て父母を養ふ。同

○天子より庶人に至るまで。孝終始な

くして。患ひ及ばざるものは。未だこれ有らざるなり。同

○天地の性。人を貴しとす。人の行ひ。孝より大なるハなし。孝ハ父を嚴よりより大なるハふし。同

○父子の道は。天性なり。君臣の誼なり。父母これを生む。續くことこと。より大なるハなし。君親これに臨む。厚きこと

これより重きハなし。同

○その親を愛せずして。他人を愛するもの。これを悖德といひ。その親を敬せずして。他人を敬するもの。これを悖禮といふ。同

○孝子の親ふ事ふる。居よハ則ちその敬を致し。養よハ則ちその樂しを致し。病よハ則ちその憂ひを致し。喪よは則

ちその衰みを致し。祭りにも則ち其嚴を致し。五つのもの備はり。然る後よく親に事ふ。同

○親に事ふる者は。上に居て驕らず。下と爲りて亂れず。醜に在りて爭はず。上に居て驕れば則ち亡ぶ。下と爲りて亂れば則ち刑せらる。醜に在りて爭へば則ち兵せらる。三つのもの除かざれば。

日に三牲の養を用ふと雖も。猶ほ不孝とす。同

○教ふるに孝を以てするは。天下の人の父たる者を敬する所以なり。教ふるに悌を以てするは。天下の人の兄たる者を敬する所以なり。教ふるに臣を以てするは。天下の人の君たる者を敬する所以なり。同

○孝ハ德の始めなり。悌ハ德ノ序でなり。信ハ德の厚きなり。忠ハ德の正しきあり。家語

○愛敬は。人倫を厚くする乃道なり。父母を愛敬するハ又其本なり。愼思錄

○道ハ邇きに在りて。遠きに求め。事ハ易きに在りて。難きに求む。人人その親を親とし。その長を長として。天下平らあり。孟子

○孩提の童も。その親を愛することを知らざるハなく。その長ぜるに及びてハ。その兄を敬することを知らざるハあり。同

○道ハ只だ是れ目前の理。父子君臣夫婦長幼朋友の交り。一日も無かるべからざるものあり。省僧錄

○嘉肴ありと雖も。食ハざれどその旨き我知らズ。至道ありと雖も。學バざればその善きを知らず。禮記

○劍利なりと雖も。礪がざれバ斷ぜず。材美ありと雖も。學バざれバ高からズ。韓詩外傳

○有りて補ふ所なく。無くして損する所なきハ。乃ち無用の學なり。省譬錄

○有用の學ハ。譬へば夏時の葛。冬時の裘の如し。もしこれを爲ふもの無けれバ。生民の用欠くるなり。同

○學を爲す者ハ。須らく先づ學びて何事をなすといふことを會得ふべし。然らざれバ。則ち終身拮据ふとも。何ぞ己れに益あらん。靜寄軒語錄

○學問ハ全く精神に在り。精神足らざ

れバ。未ざよく成せ者あらず。畜德錄

○書を讀むい多きを貪るに在らず。只だ章句熟讀を要せ。精思すること久しければ。義理自然ゑ貫通せ。願體集

○學、胸中ゑ滿つれバ。言を出せゑ自ら蘊藉なり。理、胸中に明かゑれバ。事を行ふに自ら涵養あり。同

○一念の欲制せること能ハざれバ。禍ひ滔天に至る。畜德錄

○事を做せは。最も熟思して緩處せべし。熟思すれバその理を得。緩處すれバその當を得。紳瑜

○薛文清公嘗て自ら言ふ。二十年、一の怒の字を治めて。未だ盡きず。是を以て。己れに克つの難きを知る。

○盛怒の時ゑ方りてハ。愼みて妄りゑ

簡を與へ。言を發せることと勿れ。こゝを妄りふすれば。必ず悔いあり。貝原益軒

○學ハ及ばざるが如くす。猶ほこれを失ん事を恐る。論語

○君子は能なきを病む。人の己れを知らざるを病まず。同

○古の學者ハ己れの爲めにす。今の學者は人の爲めにす。同

○心を立つるハ。忠信よりして欺むかざるを以て本とす。胡文定公

○人にして信なくんば。その可なるを知らざるなり。論語

○人あれば。則ちこれを作し。人なければ。則ちこれを輟む。これを僞りといふ。人を觀る者ハ。その作輟を審かにするれみ。楊子

○利に放りて行へば。怨まるゝこと多し。論語

○君子は食飽かんことを求むることなく。居安きをかゝんことを求むることなく。事に敏くして。言に愼む。同

○吾れ日に吾が身を三省す。人の爲めに謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。傳へて習はざるか。同

○君子重からざれば。則ち威あらず。學も則ち固からず。同

○賢を見て齊しからんことを思ひ。不賢を見て。内に自ら省みる。同

○小人の過ちや必ず文る。同

○君子の過ちや。日月の食の如し。過つや。人皆これを見る。更むるや。人皆これを仰ぐ。同

○身の過ちなきハ。口の過ちなきよりハ難く。心の過ちなきハ。身の過ちなきよりハ難し。三つのものハ。共に禮を以て正さざるべからず。五常訓

○仲由過ちを聞くことを喜び。令名窮りなし。令人過ちあれバ。人の規をを喜むず。病を護して。醫を忌むが如し。寧ろその身を亡ぼして。曉ることなれし。近思錄

○富貴に驕るものハ戚戚たり。貧賤に安んぜるものハ休休たり。省心雜言

○君子はよく人の危きを扶け。人の急を救ふ。固よりこれ美事なり。誇らざれバ益〻善し。願體集

○凡そ人善ありとも。自ら矜るべからず。自ら矜れバ。善日に削らる。不善あらバ。自ら恕すべからず。自ら恕すれバ。惡、

日に滋す。明太祖

○書を讀むい藥を服するが如し。藥ハ妄りに服すべからず。聖人の書ふ而らざれバ。妄りふ讀むべからず。蒙を養ふの道。先入の言を主とす。畜德錄

○孝悌忠信ハ。身を立つるの大本。禮義廉恥ハ。己れを行ふの先務なり。省心雜言

○善を見てハ及バざるが如く。不善を見てハ湯を探るが如し。論語

○多言なること勿れ。多言は敗き多し。多事なること勿れ。多事ハ患ひ多し。安樂必ず戒むれバ。行ふ所として悔いふし。家語

○人を責むる深き者ハ。必ず自ら怨に。己を責むる深き者は。必ず薄く人を責む。言志錄

○躬自ら厚くして。薄く人を責むれば。則ち怨より遠ざかる。論語

○君子はこれを己に求め。小人ハこれを人ゟ求む。同

○君子ハ人の美を成し。人の惡を成さず。小人は是れゟ反に。同

○君子ハ和して同せず。小人は同して和せず。同

○士ゟして居を懷ふハ。以て士と爲るに足らず。同

○我れを非として當る者は。吾が師ゟり。我れを是として當る者は。吾が友なり。我れゟ諂諛する者は。吾が賊なり。荀子

○その心を處く。常ゟ熙春麗日の間に在れバ。天下ゟ惡むべきの人なし。解大紳

○善を爲すは。重きを負ふて。山ゟ登る

が如し。志己ふ確なりと雖も。力猶ほ及ばざるを恐る 畜德錄

○惡を爲さハ。駿馬ふ乘りて。坂を走るが如し。鞭策を加へざゝして。足亦制さること能ゝざ。同

○富弼八歳の時坐屏ふ書して曰く。口を守ること瓶の如く。意を防ぐこと城の如し。同

○孔子曰く。吾嘗て終日食ハず。終夜寐れを以て思ふ。益なし。學ぶに如かざるなり。論語

○仁に當りて。師ふ讓らず。同

○君子は世を沒へて。名の稱せられざるを疾む。同

○君子ハ言を以て人を舉げず。人を以て言を廢てず。同

○人の己れを知らざること莫患ひなし。その不能を患ふ。同

○孔子曰く。君子の道三つあり。我れよくそることなし。仁者は憂ひず。智者は惑はず。勇者は懼れず。同

○射は君子に似たること有り。正鵠を失へば。反りて己れに求む。中庸

○君子の道。譬へば遠きに行くに必ず邇きよりするが如く。譬へば高きに登るに必ず卑きよりするが如し。同

○博くこれを學び。審かにこれを問ひ。慎みてこれを思ひ。明かにこれを辨へ。篤くこれを行ふ。同

○君子はその位に素して行ふ。その外を願はず。富貴に素しては富貴に行ひ。貧賤に素しては貧賤に行ひ。夷狄に素

して。夷狄に行ひ。患難に素して。患難に行ふ。同

○日にその亡き所を知り。月にそれ能くなる所を忘るゝことなきは。學を好むと謂ふべきのみ。論語

○直を以て怨に報い。德を以て德に報ゆ。同

○丈夫の志窮して益〻堅かるべく。老ては益〻壯んなるべし。馬援

○盛怒の時に於ては。堅く忍びて動かゞ。心平かなるを俟ち。審かにして。これに應ぜ。庶幾くは失なし。許平仲

○君子敬して失ふこと無く。人と恭くして禮あらば。四海の内皆兄弟なり。論語

○衆のこれを惡むも必ず察し。衆のこれを好みするも。必ず察せ。同

○隱るゝより見はるゝはなく。微かなるより顯らかなるはなし。故に君子はその獨りを愼しむ。中庸

○凡そ事を作すに。始めを謹しみ。終りを慮れば。過ち寡く。悔い少し。故に事を作すにも先づ思ふ。思もゝ〳〵して輕率に事を作せば。必ず過ちあり。過てば必ず悔いあり。貝原益軒

○速かなるを欲せることなく。小利を見ることなかれ。速かなるを欲すれば。則ち達せず。小利を見れば。則ち大事ならず。論語

○道德ある者は必ず多言せず。信義ある者は必ず多言せず。才謀ある者は必ず多言せず。惟だかの細人狂人妄人は。乃ち多言せるのみ。劉氏人譜

○肥馬に乘り輕裘を衣る。朋友と共に
し。これを敝りて憾むことなからん。論語
○朋友の際。その合ふこと正しからざ
れば。久しくたて離まざるものあらば。
故に賢者は。理に順ひて安んじ行ひ。智
者は。幾を知りて。固く守る。朱熹
○己れに賢る者と處れば。自ら以て足
らぬとす。己れに如かざる者と處れば。

自ら以て餘りありとす。自ら以て足ら
ぬとすれば。日に益す。自ら以て餘りあ
りとせば。日に損す。劉氏人譜
○人の常情。多く己れが能に矜り。多く
人の過ちを言ふ。君子は然らず。人の善
を揚げて。己れが善に矜らず。人の過ち
をゆるして。己れが過ちをゆるさず。明太祖
○范忠宣公子弟を戒めて曰く。人、至愚

と雖も。人を責むるハ明かよ。聰明なりと雖も。己れを責むるハ昏し。但當に人を責むるの心を以て。己れを責め。己れを恕するの心を以て。人を恕すべし。習是編

○今の人。恩惠を受けては。多く記省せず。人よ惠むことあれバ。微物と雖も。亦歷〻心にあり。古人言ふ。人よ施してハ。念ふこと勿れ。施しを受けては。忘れること勿れと。袁氏世範

○學ハ速かなるを欲すれバ成らず。然れども亦急るべからず。纔〻に速かなる我欲をるの心あれバ。便ちこれ學ふらざる。學ハこれ至廣至大の事。豈ふ迫切の心を以てこれを爲すべけんや。畜德録

○人と論ずるにハ。須らく。容貌從容ふして。言語温厚なるべし。決して劇烈な

るべからず。紳瑜

○人たる者ハ。道理を識り。禮儀を識るを要とす。父母ゝ事へて恭敬順從し。先生の教ゝ遵依とすべし。自ら己れの意ゝ任せて。怠慢とすべからず。教子齋規

○人事を盡さずして。天命を怨むハ。猶ほ傘笠を備へずして。雨に濕ふを。天命ゝ委ぬるが如し。天豈一人の爲めゝ。雨を止むることを得んや。思ハざるの甚だしきなり。聖學自在

○我れを毀る言ハ聞くべし。我れを毀る人ハ必ずしも問ハず。我れこの事あらバ。彼れ言ハずとも。必ずこれを言ふ者あり。我れこの事なけれバ。我れ辨せずとも。必ずこれを辨ずる者あり。呂新吾語録

○孝は百行の本なり。故ゝ人として孝

ならされバ。その本先づ絶ゆ。他の善行良才ありと雖も。觀るに足らじ。貝原益軒

○舟にして游ぐに。道よりして徑せじ。身ハ父母の遺體なりこれを行ふに。敢て敬せざらんや。小學詩禮

○能を以て不能に問ひ。多きを以て寡きに問ひ。有れども無きが若く實つれども虛きが若く。犯せども校せず。論語

○言笑寡ければ則ち莊重。言笑多ければ則ち輕褻なり。人の敬をると慢するとは。我れ實よりこれを招ぐ。多識編

○自ら信ずるものハ。人を疑ハじ。人も亦これを信ず。疎遠も皆同胞たるべし。自ら疑ふものハ。人を信ぜじ。人も亦これを疑ふ。骨肉皆仇敵と成る。願體集

○聰明よりして重厚。威嚴にして謙冲。人

の上たるものハ當ヨ此の如くなるべし。言志錄

○信を人ヨ取るハ難し。人、口を信ぜずして。躬を信ず。躬を信ぜずして。心を信ず。是を以て難し。同

○君子は理ヨ循ふ。故ヨ常に舒泰なり。小人ハ物に役せらる。故ヨ憂戚多し。初學要

○當今の毀譽ハ懼るに足らず。後世の毀譽は懼るべし。一身の得失は慮るヨ足らず。子孫の得喪は慮るべし。言志錄

○惡人の賢人を害するは。天を仰きて唾きを吐くが如し。唾き天に至らずして。還て自身ヨ墮つ。遵生箋

○利欲ヨ迷ふものハ。酒に醉ふ人の如し。人その醜ヨ堪へず。而して。己れ覺へざるなり。讀書錄

○人驕れバ則ち志昏し。志昏けれバ則ち計短し。紳瑜

○一生の計は勤ふに在り。一年の計は春ふに在り。一日の計ハ寅に在り。五種遺規

○學ハ思ふに原づくと雖ゝ。聞思雜慮は甚ざ心術ふ害ゐり。學者胸中泰然として事なく。以て有用の思慮應接を待つべし。貝原益軒

○輕と惰とは。學を爲ふの大病なり輕きものは。未だ得ざるを以て。既ふ得ると爲し。惰る者ハ。悠緩ふして。進むこと能ハズ。同

○子の親ふ事へて。顏を承け。志を養ふこと能ハざるハ則ち必ず。君ふ忠なること能ハず。弟の兄ふ事へて。恭を致し禮を盡すこと能ハざるハ。則ち必ず。長

上ゴ遜ふこと能ハざるなり。省心雜言

○人の性質ゴ類多し。面色惡むべきあり。愛ゼべきあり。世人多くハ。面色惡むべき者を見てハ。其言善しと雖も。善しとせず。況んや諫め爭ふゴ於てをや。面色愛ゼべき者を見てハ。其言惡しと雖も。猶ほ善しとし。是れ人の心を用ふべき所なり。常山紀談

○富貴なれバ。多くハ驕奢かり。貧賤かれバ。多くハ勤儉かり。勤儉ハ富貴を生ド。驕奢ハ貧賤を致ゼ。若し常ゴ富貴を保たんと欲せば。須からく。速かゴ驕奢を戒むべし。貧賤を免かるゝことを求めんと欲せバ。早きゴ及びて。勤儉を學ぶべし。易知錄

○小大の事。未だ嘗て。儉ゴ始まりて。奢

小終らざるハあらじ。儉も元と中道よ
あらぬ。然れども。猶ほ其本を失ハぬ。蓋
し人ハ務めて末を去り。本よ反へらん
ことを欲するなり。精里集

○家を保ち。身を安んぜんと欲せば。我
れよ七字五字の戒しめあり。曰く。みの
ほどをしれ。分よ安んぜるを云ふ。曰く。
うへをみな。貴富を欽羨せざるを云ふ

ふり。杏翁醉語

○廉なる者ハ。求むることふく。欲するこ
とふく。奪ハば。貪ほらぬ。それ物各く
主あり。苟も吾ゞ所有よあらざれバ。一
毫と雖も取ること莫れ。如し人の富貴
を見て。心よ妒忌を懷き。人の財寶を見
て心よ覬覦を懷かバ。皆これ廉ふらざ
るなり。人事通

○學者の弊ハ。古を慕ふて。今を譏り。異國を貴びて。我が國を鄙しむるあり凡そ學ハ。己れの爲めなる所以んなり我が國今日の風俗ハ從ひて學バなんバ。亦何んの益あらん。是れ學者の心を用ふへき所なり。松平定信語

○書を讀むは當りて。適〻俗客の至ることあれバ。其口ハ客は接するも。其心ハ却て書はあり。是れ不敬の大なるものなり。客は接するハ當りては。專ら客はを接すべし。此の間。何んぞ書を思ふことを須ひん。卽ち是れ學なり。松平正之語

○家を御するは四つを以てす。曰く。勤儉恭恕。勤むれバ功あり。儉なれバ用足る。恭なれバ侮とらず。恕なれバ怨みなし。此の四つのもの。一つを缺くべからず

べ。文中子

○國の禮法はそむくべからず。國法ハそむきて。古の禮法を行ふハ道はそむけり。大和俗訓

○朋友相交り。議論合ハざれバ。虛心ハして。これを待つべし。若し爭氣相加へ。詬罵するに至るハ。進修の道ハあらべ。或ハ好ミて人の短長を評論し。或ハ閒

閒の細事を談ずるハ。徒だに益なきのみならず。大に事ハ害あり。それ言ハ心の表なり。愼しまざるべけんや。近世人鏡錄

○人閒萬事。謹しみに依りて行ハる。謹しみなければ。百事亂れ。善道行ハれず。過ちと禍ひとの二つも。謹しみの足らざるより生ず。謹しめバ則ち怠惰なく。驕慢なし。謹しみの一字ハ。須臾も忘る

開き不良

へからざるなり　愼思錄

小學脩身課書卷四終

明治十五年四月廿五日版權免許
明治十八年四月九日四刻御届
明治十八年四月　出版發賣

定價金九錢

編輯人　青森縣士族　南摩綱紀　麹町區富士見町二丁目廿七番地
出版人　東京府平民　栁河梅次郎　日本橋區本町二丁目十番地

製本發賣所　佐賀縣下佐賀郡白山町九十三番地
書肆　吉田庄藏

小學脩身課書

南摩綱紀編

五

K110,1
112
5